

海外提携研究機関

COE国際シンポジウム参加記

世界文明論構築の新視野

王 勇 (中国 浙江大学日本文化研究所所長)

神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の海外提携研究機関(浙江大学日本文化研究所)の長として、わたしは二回、COE本部にお邪魔したことがある。

一回目は2004年10月6日のことで、福田アジオ先生より事業概要の紹介を伺いながら、脳裏から文字を懸命に追い出して、非文字文化の構図を描こうとした。何かの弾みに、話はわたしが一時的に没頭している鍾馗像に及び、中国の鍾馗と日本の鍾馗の伝授と変容を紹介すると、福田先生は「これぞ非文字文化研究の対象だ」といわんばかりに、日本各地にみられる鍾馗信仰の図像を探し出して見せてくれた。これが非文字資料をはじめて意識的に研究に生かしたきっかけである。

二回目は2005年11月26～27日に開催された第1回COE国際シンポジウムで、テーマは「非文字資料とはなにか 人類文化の記憶と記録」である。個々の報告内容については、COE編纂の報告集にゆだねるが、二日間にわたる発表とディスカッションを聞いているうちに、歴史研究者としてのわたしは、激しい思索に誘われ、方法論の葛藤だけでなく、従来より植えつけられた文明論そのものさえ揺さぶられたのだった。

日本古代史を専攻するわたしにとって、文字資料を重視することはいうまでもないが、文字資料のなかでも、とりわけ「正史」(勅撰歴史書、日本の場合は『六国史』がそれに相当する)を信頼し、一般人の書いた歴史書を「野史」や「雑史」または「稗史」と称して、一段低く見る傾向に慣れている。

思えば、正史というのは五位(中国では五品)以上の役人のことしか記さないのである。それも国家の大事つまり「公事」に限られ、個人的な「私事」は基本的に記述の対象とならないわけだ。

ところが、世の東西を問わず、古代に遡れば遡るほど、識字層は少数派に属し、文字を知らない民族は今でも存

在しているはずだ。たとえ文字を知る知識人であっても、かれらの生活のごく一部にしか文字を使わないのである。19世紀、アメリカ人類学者L.H.モルガンの名著『古代社会』によって、文字の使用が文明社会の開幕とされ、「人類の文明史はすなわち文字の歴史だ」という通念が流行り、多くの研究者はその固定概念に囚われてきた。そのため、文字世界と縁の遠い古代庶民の生活および文字に記されていない知識人の営為は歴史家の視線から遠ざかり、民俗学者の視野にとどまるのみとなった。

人類の歴史を振り返ってみれば、文明創造の活動は文字に記されるものよりも、色彩があり、動きがあり、音声があって、多様多彩なものだったのである。つまり、人類の文明史は文字によって記されただけでなく、さまざまな道具、絵画や彫刻、そして建物や景観などにも刻まれているはずだ。また、世界各地にみられる特有な文明創造の遺伝子は、現代人の手まねや身振り、しぐさや作法などの身体技法にも記憶されている。

こうして、しばらく文字の世界から目をそらして黙想すると、眼前に非文字文化の世界が音色にあふれて無限に広がっていくような気がする。これが他ならぬ国際シンポジウム「非文字資料とはなにか 人類文化の記憶と記録」に参加しての率直な感想である。

膨大な非文字資料に関して、従来、民族学者や言語学者それに美術研究者らによってまったく渉猟されなかったわけではないが、画像・道具・景観・伝承・作法・音声・建築などといった個々の事象を体系づけることが、福田アジオ教授を代表とする神奈川大学COEプログラムの目指す目標だと思う。この大業を成し遂げたときは、世界文明史が再構築される時であるに違いない。

わたしどもの研究所は由縁あって、2005年12月をもって、浙江大学から浙江工商大学に移転し、今後は引き続き海外提携研究機関として、この世界文明史再構築の偉業に加わらせていただきたく存じる。

非物質文化遺産研究との連携

王 曉葵 (中国 中山大学中国非物質文化遺産研究センター助教授)

この度、神奈川大学21世紀COEプログラム海外提携研

究機関関係者として、国際シンポジウム「非文字資料と